

レヴィナスにおける「呼吸」について——詩と音

阿式祐斗(京都大学)

エマニュエル・レヴィナスは第二の主著『存在するとは別の仕方』(1974)において、「私」が他者の身代わりとなる倫理的状況を、「息を吸うこと(=靈感)」[inspiration]として描き出した。レヴィナスによれば、自己の核である肺さえも曝け出しつつ、「同のなかの他」に至るまで「みずからのうちに他人を宿すこと」が、主体の感性を「心性」[psychisme]として定義する。このような意味で、レヴィナスにおいて息を吸うということは、われわれの感性的な身体に他者への倫理的方途が見てとられる契機だと捉えることができる。

本発表は、レヴィナスにおけるこの「息を吸うこと」の様態のなかで、「音」や「詩」といった形象にどのような意義を見出すことができるかを考察する。『存在するとは別の仕方』のレヴィナスによれば、「息(=靈魂)」[psyché]の通う「心性」[psychisme]においては「アルペジオによってのみ奏でられる和音」が聴き取られるという。また、初期のレヴィナスが自身の哲学を「音の現象学」として構想していたことは『レヴィナス著作集』(2009～)の刊行によって明らかにされ、近年つとに注目されているところである(Dan Arbib, « De la phénoménologie du son à la phénoménologie du visage », 2012., Danielle Cohen-Levinas, « La phénoménologie et son double. *Le son parole, la parole sonne* », 2012. など)。『全体性と無限』(1961)を含む中期の思想においては後景に退いたかに見える初期の「音の現象学」のモチーフを、後期の「呼吸」をめぐる言説のなかに見出すこと、これが我々の第一の目標である。

他方、レヴィナスは「現実とその影」(1948)をはじめとした論考において、一般に芸術批判のひとつとして知られている。芸術がつくりだす現実から離脱した像[image]を、レヴィナスは他者の顔に対置する。顔の倫理が存在の彼方へと導くものであるとすれば、芸術が生む像は存在の手前にとどまるものである、というのが芸術への彼の基本的態度である。ただ同時に、レヴィナスは幾人かの詩人について語ったテキスト(「エドモン・ジャベスの今日」、「パウル・ツェラン 存在から他者へ」など(どちらも『固有名』(1976)収録))において、詩が言語の可能性として、深々とした「呼吸」に至る「語ること」でありうると述べている。レヴィナスにおいて、存在のロゴスとして固定化された「語られたこと」を「語ること」によって絶えず言い直すことが倫理的振る舞いであるとするなら、詩には、存在の彼方である倫理への方途が見出されるのではないだろうか。息を通して語られる詩において、レヴィナスにおける芸術と倫理の交点を探ること、これが我々の第二の目的である。

以上のような取り組み、すなわち、「呼吸」をめぐるレヴィナスの思考のなかで「詩」や「音」といったモチーフを検討することはどのような意義をもちうるだろうか。我々の見立てによればそれは、倫理性と感性との入り混じる「呼吸」という行為から、芸術のいわば aesthe-ethic な次元の賭け金を見出すことであり、ほかならぬレヴィナスの思想を通じてそれを試みることができるのではないかと示すことである。